女性の心、きれいに写す

妊婦・乳がん患者 ヌードに

世田谷のスタジオ

東京都世田谷区の住宅街に、妊婦を撮影する写真スタジオ「ネーブル」がある。カメラマンも含めスタッフはすべて女性だ。リラックスした雰囲気のなか薄布をまとったり、花を持ったりしながらの「臨月記念」。毎月80人。最近は乳がんを患う女性など妊婦以外にも広がりつつあるという。（永沼仁）

「赤ちゃんの名前は決めた？」「だんなさんと、どうやって出会ったの？」

硬くぎこちなかった妊婦の表情が、カメラマンとの会話の中でみるみるうちに緩んでいく。暗幕を背に照明を浴び、月のようにも見えるおなか。体をカメラにさらすことへの抵抗感が薄れるにつれて、妊婦はせり出したおなかを自然にカメラに向けていく。数十～100カット以上の撮影が一気に済む。

世田谷区上野毛地区の住宅街。夫とシステム企画会社を営む高田奈付子さん(29)が1年半前、自宅に設けたスタジオだ。きっかけはその半年ほど前、早産で入院した時の思いだった。

2カ月のベッド生活。雑誌に載っていた妊婦のヌード写真に目が止まった。喜び、不安、覚悟……。自分にも同じように押し寄せる様々な感情。「そんな気持ちをありのままに記録したくなった」。願いはかなえられなかったが、出産後に「それなら自分で」と思い立った。

人物写真が得意な写真家を探し、シンプルで体の線がきれいに出るモノクロ撮影にこだわる。「撮られる方も、カラーより恥ずかしさが薄まるようです」とカメラマンの早野知子さん(31)。

始めて間もなくは客足が鈍かったが、今年6月、歌手のhitomiさんの「臨月ヌード」が話題になると問い合わせが急増。毎月80人前後がスタジオを訪れる。

豊島区から来た女性(35)は結婚生活7年。不妊治療を2年間続けた末、授かった命に思い入れがあった。「次にできるか分からないので、夫についてきてもらいました」。兵庫に里帰り出産する前に来た女性(35)は、夫と2歳の息子と一緒に「七五三のような感覚」で撮影。張り出したおなかの写真を見て「きれいな曲線」と感じ、満足したという。

高田さんは「少子化の時代、出産の尊さを強く感じる人が増えている」と思ってきたが、最近は妊婦だけではなくなってきた。サンプル写真を見て「ポジティブな印象を受けた」という乳がん患者や子育てを終えた夫婦も訪れるようになった。「どこか、前向きに生きようという人たちが自らを記録する、そんな気持ちを応援したい」

スタジオの撮影風景。出来上がりは、いかにリラックスしてもらうかにかかっているという＝東京都世田谷区、永沼写す

デイズ DAYS